

編集後記

はやいもので本誌が創刊されて満10年をすぎ、本号は10年を締めくくる号となった。この間、我が国のリハビリテーション医学の進歩がどれほどであったかはここでのべるまでもないことであり、そして、本誌が果たした役割も大きかったと自負している。実際、4日前に、第44回米国リハビリ医学アカデミーに出席して帰ったところであるが、演題の数は多いものの内容的にはさして目新しいものもなく、日本のリハビリ医学の進歩を自覚したくない。余談となるかもしれないが、米国でのこのような現象がみられる原因の一つには、今のレーガノミックスの影響によって米国全体の医学研究の低迷と、もう一つは、リハビリ医学を世界最高のレベルまでおしすすめた先達が第一線を退き、リハビリ医学界での若がえりの時期にあるためとも思われた。

さて、本号では特集として「排尿障害」をくんだ。リハビリ医学分野での排尿障害は“神経因性膀胱”が主体であり、リハビリ専門医は十分な知識をもとに、これらの患者のプライマリー・ケアにあたらなければならない

い。今回、生理と病理は今林氏他、診断は石堂氏、脳卒中は土田氏他、脊損は岩坪氏他、また、二分脊椎は小柳氏と、我が国での第一人者に御執筆いただいたことは望外のよこびである。教科書にない up-to-date の知識がもりこまれており、リハビリ専門医を志す人々の必読編となろう。

「研究と報告」も投稿数もふえ、また、内容も充実したものが多く編集者一同うれしい悲鳴をあげているところであり、できるだけはやく印刷にのるよう努力している。

講座の「評価法」では綿森氏が CADL を紹介して下さり、失語症リハビリの新しい動向であり、明石氏の「反射」とあわせて大いに啓蒙されるであろう。また、日頃尊敬する林氏より巻頭言をいただき、氏のリハビリ医学の将来に対する警告ともいえるもので、本誌の第11巻目の新しいステップを迎えるときに有りがたい御指摘をいただいたと感謝するしだいである。

最後になりましたが、皆さまどうぞよいおとしをお迎え下さい。

(千野 直一)

次号予告(第11巻 第1号)

特集 リハビリテーション行政

序文	国立リハセンター	若 松 栄 一
リハビリテーション病院の体系	国立リハセンター	初 山 泰 弘
社会保障とリハビリテーション	厚生団	大 村 潤四郎
地域におけるリハビリテーション		
行政推進上の課題	厚生省更生課	河 野 康 徳
育成医療の問題点	高知・子鹿園	江 口 寿栄夫
社会復帰脊損者に対するリハ行政：総合せき損センター3年間の実績から	総合せき損センター	赤 津 隆

巻頭言 創刊11年目を迎える

「総合リハビリテーション」	神奈川リハセンター	土 屋 弘 吉
---------------	-----------	---------

研究と報告 CT および RI angiography 動態による

脳梗塞麻痺の予後に関する検討	神奈川リハセンター	豊 原 敬 三・他
Down 症児の超早期言語訓練	北九州市立療育センター	大 貝 茂・他

臨床経験 寒冷療法の検討：変形性膝関節症

について	昭和大・整形外科	丸 山 俊 章・他
------	----------	-----------

講 座

CT (1) 原理	東大・放射線科	竹 中 榮 一
車椅子(1) 車椅子の構造と機能	東京都身障センター	加 倉 井 周 一

一頁講座

スプリント(1) スプリント総論	川崎医大	明 石 謙
------------------	------	-------

学会報告

第34回関東リハビリテーション医学懇話会	東京医歯大	竹 内 孝 仁
----------------------	-------	---------

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
小 池 文 英
杉 山 尚
砂 原 茂 一
津 山 直 一
水野 祥太郎
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
萩 島 秀 男
加 倉 井 周 一
賀 集 竹 子
河 邨 文 一 郎
小 島 蓉 子
五 味 重 春
齊 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 田 玲 子
高 橋 勇
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 歆
橋 倉 一 裕
長 谷 川 恒 雄
林 玉 子
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田、山田)